



古代アレキサンドリアの図書館を想う

岡崎 才蔵

最近、新聞に「古代都市アレキサンドリアの遺跡発見」という見出しが小さく出ていた。アレキサンドリアの図書館については、文献的には、いろいろと書き残されたものはあるが（紀元一世紀には70万の蔵書を所有していたなど）、しかし、考古学的には、その建造物の石一つすら見つかっていない。それでその後の成果について期待しているのであるが、未だ続報はとんとない。もっとも遺跡が海の下では、そううまく行くはずもなからうが。

旧約聖書のシラ書の序言に「エウエルゲテス王の治世第38年に、私はエジプトにやって来て、暫く滞在したが、その時かなり重要な教訓が記されている書物の写しを見つけた」という1節がある。エジプトのどの都市とは言っていないが、ご存知のようにアレキサンドロス大王は支配を固めるために、新都市を建設し、マケドニア兵を駐屯させて、その帝国支配を根付かせた。なかでも有名なのが、エジプトのアレキサンドリアである。大王の死後、エジプトはアレキサンドロスの竹馬の友であったプトレマイオスによって支配された。その王朝は、あのクレオパトラの死で幕を閉じるのであるが、その間、16名の王が立ち、どの王もすべてプトレマイオスを名乗った。ローマ帝国の治下においても、東のアンチオケア、西のアレキサンドリアと言われるほど、文芸の中心地として発展し、アレキサンドリア学派と呼ばれる知識人を多く輩出した。その基礎はアレキサンドリアを中心にエジプトのヘレニズム化を推進して、ギリシャ本土から学者や文化人を招き、ムセイオン（学士院：博物館の語源）と図書館を建設したプトレマイオス1世とその後継者たちの努力によるものである。

エウエルゲテス王というのはプトレマイオス8世のことで、その「治世第38年」は紀元前132年にあたる。当時、どの程度のユダヤ人がアレキサンドリアに住んでいたかを記録した文書はないが、フィロ（イエスの時代の人物）によれば、その100年後のローマ時代には、約100万人が居住していたとされている。エジプトに住むユダヤ人はギリシャ語を使い、ヘブル語を解さなくなった。「アリストテラスの手紙」は、アレキサンドリアの図書館が王立図書館で、その最初の責任者がファレロンのディメトリウスだったとしている。「ディメトリウスは……もし可能ならば世界中のすべての書籍を収集できるほどの多額の予算を自由にしていた。……ある日、もう何千冊の書物が集まったかと尋ねられて、彼は次のように答えた。『陛下、20万冊以上かと思われます。未収蔵のものについても直ちに探し出すようにしますので、全体で50万冊には達しようかと考えられます。』」と述べている。更に、この手紙には、旧約聖書の「モーセ五書」のギリシャ語訳の翻訳事業が言及されており、それがこの図書館に収蔵されたとしている。この伝承に由来して、ギリシャ語訳聖書を「70人訳聖書」と言うようになるのであるが、実は、「旧約聖書」の他の34冊の翻訳については何も触れられておらず、それらの翻訳が何時行われたのかは闇の中である。しかし、先ほどの「序言」が書かれた頃には、他の文書の翻訳も完成していた、と推測できるので、ベン・シラの孫があの大図書館に通い、そこで「重要な文書」を発見したと想像するのも楽しい空想である。

(Saizo OKAZAKI：人文学部教授)

典礼聖歌 — 主としてその歴史について

藤塚あつ子、岩間潤子

前回カトリコス 19号で高田三郎氏の経歴と業績についてとりあげ、「典礼聖歌」との関わりについても紹介している。今号では、もう少し詳しく、聖歌全般の歴史と「典礼聖歌」について記したいと思う。

聖歌集^{注1}の歴史

キリスト教はユダヤ教から礼拝の要素を受け継いだ。聖歌^{注2}も例外ではないようである。新約聖書の最後の晩餐の場面で、キリストが「賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた」（マタイによる福音書 26：30）とあるが、これはユダヤ教のハレル詩編だったとされる。さらに、パウロはフィリピで投獄されたときに「賛美の歌で神に祈った」（使徒行録 16：25）とも記されている。また、パウロは手紙の中でキリスト賛歌を引用し（エフェソ人への手紙 5：14 他）、詩編や霊的な歌とともに賛歌で神を賛美するよう勧めている（エフェソ人への手紙 5：19、コロサイ人への手紙 3：16）。これらの記述から、初期のキリスト教においても、ユダヤ教の伝統に即して賛美することが継承されているように思われる。ただ、実際にユダヤ教の聖歌がどのように歌われていたかについては、はっきりしたことはわかってはいない。聖歌の始まりは、祈りの言葉としての聖歌、主として詩編で歌われている賛歌、旧約聖書に基づく賛美の歌の3つが考えられる。残念ながら、初代教会の時代に、詩編以外にどのような聖歌が歌われていたかについて確認する資料は残されていないようである。いずれにしても礼拝に不可欠であったことから、聖歌は礼拝において神を賛美する時に歌われた歌を始まりとする見方が強い。

古代教会においては聖歌集として残っているものはないが、キリスト生誕地にも近い東方教会^{注3}では自らの正統意識が強かったことから、聖歌も典礼も西方とは異なる独自の伝統を守り続けた。この東方教会のあった地域では、地域ごとに独自性を持ちながら、またローマ帝国分裂後の様々な変遷を辿りつつ、今日まで独自の聖歌伝統を温存している。主なものとしては、交唱の始まりとされるシリア聖歌、アルメニア聖歌、コプト聖歌（エジプト）、アビシニア聖歌（エチオピア）、そして東ローマ帝国御用達ビザンツ聖歌があげられる。西方教会^{注4}においてもアルメニア典礼では詩編唱と詩編を伴ったアレルヤ

注1：典礼で歌われる聖歌を収めた書を意味する。

注2：典礼聖歌 Chant は、ラテン語 cantare（歌う）を語源とする。

典礼聖歌は旋律を伴う歌で、典礼（教会の正式な礼拝の意味）儀式の一部分を形成するもので、一般の讚美歌とは異なる。一般の讚美歌は宗教儀式の雰囲気盛り上げるが、その儀式に絶対必要な一部分ではない。普通、典礼聖歌では、全音階（ドレミの7音階）の独唱である。その形態は単純な旋律で唱えるように歌うものから、複雑で表現豊かな旋律で歌うものまでさまざまである。

注3：今日、一般的には東方正教会、別称ギリシア正教会をさす。ただし、ここでは、東方正教会（ロシア正教、ギリシャ正教など）と東方諸教会（アルメニア教会、コプト教会など）をも含む東方キリスト教という広い意味で用いている。

注4：ローマを中心としたローマ・カトリック教会を指して用いられる場合と、プロテスタントとカトリックを総称して用いられる場合がある。ここでは、古代のローマ・カトリック教会をさす。

が一組となって聖書朗読されており、古くから典礼には詩編を中心とする聖歌が用いられてきたようである。修道院における聖歌の中心は詩編唱和であり、会衆の参加するミサでも詩編を中心に執り行われていたとされている。そのほかでは、より広く会衆の賛歌として感謝の賛歌（サンクトゥス・ベネディクトゥス）、あわれみの賛歌（キリエ）、栄光の賛歌（グロリア）、平和の賛歌（アニヌス・デイ）が歌われていたという。

中世の聖歌集としては、8世紀前半の『オルド・ロマヌス』（第1集）が西方教会に残されている。9世紀になると記譜されていない『ローマ・ミサ聖歌集』（Graduale）が出現し、10世紀初頭には記譜されたものも現れた。ただし、当時の譜面には音高の表示がなく^{注5}、単旋律聖歌が主流であった。

11世紀には典礼における音楽の高度化・専門化が進み、ミサの賛歌がより複雑となっていった。11世紀以降、多声音楽が教会で認められ、各地で聖歌集が作られるようになる。この頃の一般賛歌はラテン語だけではなく、各地の言語が用いられ、言語文化圏ごとの多様な聖歌が作られていった。

近代になると、トリエント公会議による典礼改革のひとつとして、各地の聖歌が整理された。教会でラテン語による典礼を正式な典礼とする事に伴い、ラテン語のグレゴリオ聖歌が正式の聖歌とされるようになった。グレゴリオ聖歌はその名を、教皇グレゴリウス1世（在位590-604年）にちなんで名づけられたという。しかし、今日伝わっている形の大部分が成立したのはもっと遅い8-9世紀頃、場所はローマではなくアルプスより北のガリア・ゲルマン地域においてであるというのが現在の有力な説である。しかし前述のとおり楽譜つき聖歌集が現れるのは10世紀で、聖書による歌詞はともかく、それ以前の旋律については記録がないため、その成立は不明な点が多い。成立に関する諸説があるように、現在歌われている聖歌が一時期に全て作曲されたとは考えにくく、様々な地域の影響を受けながら長い時間をかけて形成されていったのであろう。西方世界に広がりを見せたこの聖歌はやがてローマにも受け入れられたが、多声音楽の発展に伴い衰退の一途をたどった。このような時代背景の中、トリエント公会議で教会音楽も含めた典礼の改革が図られたのである。そして、その改革後の典礼のために改訂聖歌集が必要とされるようになった。

1614年にローマで『メディチ家版』といわれるグレゴリオ聖歌の楽譜が出版され、『ローマ聖務日課書』に組み込まれ、1907年にバチカン版『ミサ聖歌集』が出版されるまで用いられた。1873年にメディチ家版の改訂版となるレーゲンスブルク版の聖歌集が『ピウス9世の聖務日課』として出版され、これが公式な聖歌集として認められた最初のものである。

1903年に教皇ピウス10世がグレゴリオ聖歌を教会音楽の基本と位置づけ、バチカン版作成委員会を組織した。以降、1905年『キリアーレ』、1907年『ミサ賛歌集』、バチカン版『ミサ賛歌集』、1909年『死者のための聖務日課』、1911年『一般賛歌集』、1912年『聖務日課のためのローマ教会聖歌集』を編纂し、1908年に『ローマ・ミサ賛歌集』を規範版として出版した。しかし、これらの聖歌集は、全てラテン語によるものであり、専門的な基礎訓練を必要としていて、会衆の典礼への参加をうながす典礼

注5：ネウマと呼ばれる記号を用いて記譜した楽譜はネウマ譜と呼ばれるが、初期のネウマは旋律の上行・下行を線の上がり下がりカーブで可視的に標記したものであり、音高の表示は曖昧だった。11-12世紀頃、譜表（音の高さを表すために引かれた長い横線）を1本引いてその上下へ音程の高低に従い音符を書き分ける記譜法が現れた。譜表は1本線から始まって徐々に増え、13世紀頃から4線譜に角形ネウマを記入する形へと変わり、相対的な音の高さしか分からなかったものが明確に音高を表示するようになっていく。

運動とは相反していた。

第二次世界大戦後、教皇ピウス 12 世の回勅が出され、典礼運動を更に推進するために、聖歌を専門家の歌ではなく会衆の賛美の声、信仰告白、祈りとして位置づけ、会衆にとって聖歌がさらに身近なものとなるよう務められた。この後、第二バチカン公会議の『現代世界憲章』^{注6}において、諸民族の伝統や新しい芸術形式も認めるべきであるとされ、会衆が積極的に典礼に参加し、賛美できるようにという趣旨から、典礼聖歌の国語化の運動が起こった。これに伴い日本においても、日本語の歌詞による日本的な旋律による聖歌を求める動きが始まった。そして今日、日本のカトリック教会では、新しく作られた日本の『典礼聖歌』を使ってミサを行うようになったのである。

日本の『典礼聖歌』について

現在の日本のカトリック教会において公式な聖歌集として利用されているものは、『典礼聖歌』と『カトリック典礼聖歌集』である。ほかに、『ローマ・ミサ典礼書』、『ローマ・ミサ聖歌集』、『聖務日課のための聖歌集』、『聖務日課のための答唱集』、『簡易ミサ聖歌集』があるが、いずれも規範版とはされていない。

『カトリック典礼聖歌集』は、グレゴリオ聖歌を五線譜に書き換え、ラテン語を日本語に翻訳した『公教聖歌集』をもとにして、聖歌集改訂委員会が改訂している。『公教聖歌集』の歌詞が翻訳そのままの意味がとりにくくなっていたことと、万葉調なため分かりにくい点、曲のフレーズと文節が一致しないことなどの問題点が指摘されたことにより、司教協議会が京都教区長であった古屋義之司教を委員長とする聖歌集改訂委員会を組織し再検討することを決議した。もとの聖歌集を 20 分の 1 程度削除し、代わりに新しい曲を公募作品のうちから選んで取めたものであり、エキュメニカル^{注7}な方向を示すために、讚美歌を 10 曲末巻に収録している。初版は 1966 年に発行され、現在も使用されている。

『典礼聖歌』は、上記の流れと並行して、第二バチカン公会議の方針が出されたことにより、全く別の、より日本的なものが求められるようになり作られたという経緯がある。第二バチカン公会議で自国語による典礼を推進するとされたことに伴い、日本のカトリック教会は、それまでのグレゴリオ聖歌によるミサではなく、日本語による、日本人に親しまれている音階を使用した典礼聖歌によるミサを行うことをめざした。この動きは典礼聖歌編集部を中心として、新しい聖歌を生み出すこととなる。これを受けて、聖歌集改訂委員会委員の高田三郎氏に対して、典礼聖歌編集部の責任者であったイエズス会の土屋吉正神父から、正式に作曲作詞するようという命が出された。最初は聖歌集改訂委員会委員長であるエリザベト音楽大学学長ゴーセンス神父へ依頼されたのだが、神父により推薦されたのが高田三郎氏である。高田三郎氏は、教会オルガニストとして長年ミサの伴奏を行い、グレゴリオ聖歌に精通し、従来から熱心なカトリック信者であった。氏は「ミサは一貫した手法の中で、それぞれの儀礼に対応するそれぞれの変化が必要であり、教会の祈りやミサへも続かなければならない。」「すべては一定の様

注6：第二バチカン公会議において「ミサにおいて、また秘蹟の受与においてもさらに典礼の他の分野においても、国語の使用は人々にとって非常に有益な場合が多いため、広範囲に国語を使用することが出来る」とされた。（典礼憲章 36）

注7：Ecumenical Movement. 世界のキリスト教諸教会の一致と協力を求めて、その具現のため尽力する運動のこと。カトリックにおいては 1964 年第二バチカン公会議で諸原則が表わされた。

式のもとに、相互に調的、音型的、旋律的関連を欠くことがあってはならない。」そのため「全部を一人でやるしかない」と書いている。現在使用されている『典礼聖歌』は、典礼聖歌編集部が全国から公募しその中から選んだものであり、日本人の作詞・作曲家により、多数の日本語の聖歌が収録されているが、圧倒的に高田氏作曲によるものが多いのは当然のことと言えるだろう。日本人による日本語の典礼聖歌集である『典礼聖歌』の誕生に対する高田氏の功績については、前号で触れたとおりであるが、教会音楽に対しても、彼の作曲によるものは宗教曲として各地の合唱団に選ばれ、プロテスタントの礼拝においても聖歌隊によって歌われているなど、現在に至るまで大きな影響を及ぼしている。「聖書を歌うという聖歌の目標は同じ」という彼の思いが伝わったのである。

***現在までに出版されている南山大学所蔵の日本のカトリック典礼聖歌集：**

- 『日本聖詠』（ルマルシェル編，三才社，1907）（CAT1/196.5/19）
- 『公教聖歌』（アンリ・ドマンジエル編，玫瑰塾，1911）（CAT1/196.5/11）
- 『公会堂羅甸歌集』（ラゲ編，エ、ラゲ，1917，改訂増補再版）（CAT1/196.5/42）
- 『公教聖歌集』（光明社編，光明社，1933）（CAT1/196.5/22）
- 『公教典禮聖歌集』（光明社編，中央出版社，1943）（CAT1/196.5/7）
- 『公教典禮聖歌集』（光明社編，光明社，1950，再版）（196K/872）
- 『カトリック羅典聖歌集』（長崎カトリック司教館編兼発行，1954）（CAT1/196.5/35）
- 『バイブルソングス』（G・シュトルム作曲，音楽之友社，1960）（CAT1/196.5/45）
- 『カトリック聖歌集』（聖歌集改訂委員会編，光明社，1966）（CAT1/196.5/36）
- 『詩編をうたう』（松本三朗編，オリエンズ宗教研究所，1970，3版）（CAT1/196.5/46）
- 『典礼聖歌：一般用』（典社聖歌編集部編，あかし書房，1980）（196K/402）
- 『典礼聖歌：伴奏用』（典社司教委員会典礼聖歌編集部編，あかし書房，1980）（196K/917）
- 『カトリック典礼聖歌集』（典礼音楽研究会編著，中央出版社，1992）（196K/585）
- 『典礼聖歌：合本出版後から遺作まで』（高田三郎，[高田留奈子]作曲，オリエンズ宗教研究所，2004）（196K/890）

参考文献：

- 『現代カトリック事典』（ジョン・A. ハードン編著，エンデルレ書店，1982）
- 『典礼聖歌を作曲して』（高田三郎著，オリエンズ宗教研究所，1992）
- 『教会音楽史と賛美歌学（キリスト教音楽入門）』（横坂康彦著，日本基督教団出版局，1993）
- 『新カトリック大事典』2, 3（上智学院新カトリック大事典編纂委員会編，研究社，1998-2002）
- 「カトリックの典礼音楽の歴史と現状－聖歌集の変遷をめぐって－」（宍功著，『典礼と音楽』季刊18号 p.22～27）
- 『グレゴリオ聖歌』（水嶋良雄著，音楽之友社，1966）
- 『岩波キリスト教辞典』（大貫隆 [ほか] 編，岩波書店，2002）

（Atsuko FUJITSUKA, Junko IWAMA：図書館事務課）

「カトリック文庫」の利用について

日頃より、資料をご寄贈くださった方々を始め関係者のみなさまには暖かいご支援ご理解をいただき感謝いたします。カトリック文庫の資料については所蔵目録の刊行を目標に、順次、委員によるオンライン登録を行ってはいますが、なお未整理資料が多く、カトリック文庫資料室としての整備の遅れなどもあり、利用についてはご不便をおかけしています。大変心苦しく申し訳なく思います。このような事情により現在および当面の間は、暫定的な規程により利用していただくこととなっています。

- ★利用対象者：研究目的の明確な方に限ります。身分証明書をご持参の上、来館してください。
- ★利用対象資料：原則としてすべての資料。ただし、資料の状態によって、一部ご利用を制限させていただくものもあります。
- ★利用可能時間：月～金曜日：8:45～16:30 土曜日：8:45～11:30
- ★閲覧サービス：資料は、貴重室に収蔵していますので、オンライン目録（NeoCILIUS Knowledge OPAC）で検索し、出納後、指定された場所で閲覧できます。また、未整理資料の一部はカトリック文庫資料室内で閲覧できます。複写および館外貸出は原則としてできません。
- ★図書館 ILL サービス：文献複写、相互貸借は原則として受け付けておりません。

「資料寄贈者等（前号以降から 2005.10 まで）」

カトリック文庫収蔵資料のため、また、愛知万博のパートナーシップ事業として行われた高田三郎作品による「ひたすらないのち 愛知演奏会」および本学図書館秋の企画展「カトリック作曲家 高田三郎とその世界」のため、以下の方々から資料等をご寄贈またはお借りいたしました。ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

- [個人] 高田留奈子氏、鈴木茂明氏、斉藤克弘氏、上田征志氏、山口昌子氏
[団体] 豊中混声合唱団

「カトリック文庫委員新委員紹介」

石田 信（図書館事務課電子情報係）

図書館で勤務してから初めてカトリック文庫委員となりました。南山大学建学の理念と大きくかかわっているカトリック資料にふれる好機を大いに生かし、委員の仕事をがんばりたいと思います。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第 20 号 2005. 11. 1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員：児玉あずさ、牧野多完子

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/katholikos/katholikos-index.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL : 052-832-3163 FAX : 052-832-3462 担当者：児玉

